

ごみ処理の将来計画について お知らせします

一般廃棄物処理基本計画を策定しました
地球環境に配慮した循環型社会を構築するためには、更なるごみ減量に努めるとともに、ごみを可能な限り分別して再資源化率の向上を図らなければなりません。
そこで、本市は、平成18年度を初年度、平成30年度を目標年度とした「豊岡市一般廃棄物処理基本計画」を策定し、ごみ量の将来予測と分別区分の見直しを行いましたので、市民の皆さんにお知らせします。

平成22年度からステーション収集を10分別とします

現在、豊岡市は、平成25年度稼働を目指し、香美町、新温泉町とともに北但広域ごみ・汚泥処理施設（以下「新施設」という）の建設計画を進めています。新施設は共同処理となりますので、効率的な処理を行うためには、現在の異なった分別区分を統一しなければなりません。
そこで、1市2町で協議を重ねた結果、新施設稼働後は13分別とすることにしました。

粗大ごみ・蛍光灯・乾電池・びん・かんの5つが新たに分別区分に加わります

10分別を実施するといっても、「粗大ごみ」は、現在ステッカーを貼って排出されている大型ごみの呼称が変わるだけです。

「蛍光灯」についても、排出する容器を別にするだけなので大きな変わりはありません。「乾電池」については、今まで収集対象ではなかったボタン電池等も対象とする予定なので、現在より利便性が向上します。

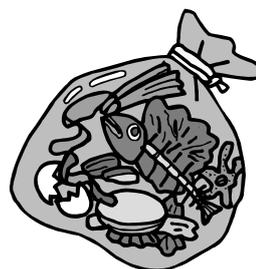
さらに、現在同一の袋で収集している「びん」「かん」を別々に収集することにより、かん類は金属として売却し、びん類は外部委託ではなく自施設で選別することが可能になり、再資源化率の向上が図れます。

しかし、豊岡市では、13分別の内「新聞紙・雑誌」「段ボール」「紙パック」の3区分については、現在と同じく集団回収で対応することになっていますので、ステーション収集としては下表のとおり10分別となります。

実施時期は、新施設稼働前の平成22年4月から実施する予定です。



区分	現在の分別区分	新たな分別区分(平成22年度実施)	
ステーション収集	燃やすごみ	燃やすごみ	
	燃やさないごみ (蛍光灯・乾電池を含む)	燃やさないごみ	
		蛍光灯	細分化
		乾電池	細分化
	びん・かん	びん	細分化
		かん	細分化
	ペットボトル	ペットボトル	
	紙製容器包装	紙製容器包装	
プラスチック製容器包装	プラスチック製容器包装		
集団回収	大型ごみ (袋に入らないためステッカーを貼って排出するごみ)	粗大ごみ	呼称の変更
	新聞紙・雑誌	新聞紙・雑誌	
	段ボール	段ボール	
	紙パック	紙パック	



新施設の焼却炉の規模を当初計画から1日当たり62トンの大幅縮小

現在の1市2町の焼却施設では、し尿処理汚泥と下水汚泥(以下「汚泥」という)の焼却は行っていないが、新施設ではごみと一緒に汚泥も焼却する計画としています。

汚泥の焼却も含めた新施設の焼却炉の規模(1日当たりの処理能力)は、昨年12月10日に配布しましたチラシには約190トン/日(187トン/日を切上げ)で見込んでいましたが、その後、さらにごみ量・汚泥量を精査した結果、174トン/日に縮小することができました。

平成13年度に合併前の1市10町が見込んだ236トン/日から比べると、規模にして62トン/日、率にして26.3%の大幅な縮小となります。【下表参照】

これにより、施設建設費を大幅に削減(約32億円)することができま

施設稼働時(平成25年)の1市2町のごみ量の推計値と新施設の焼却炉の規模

区分	北但地域ごみ汚泥処理基本計画推計値(H13)	北但一般廃棄処理基本計画		増減量 (-)	増減率 /
		一次推計値(H16)	二次推計値(H17)		
処理量計(t/年)	63,380	50,173	46,635	16,745	26.4%
うち可燃ごみ(t/年)	55,532	42,654	42,072	13,460	24.2%
うち汚泥(t/年)	7,848	7,519	4,563	3,285	41.9%
施設規模(t/日)	236	187	174	62	26.3%
うち可燃ごみ(t/日)	207	159	157	50	24.2%
うち汚泥(t/日)	29	28	17	12	41.4%

施設規模(t/日) = 処理量計 ÷ 280日(稼働日数) ÷ 0.96(調整稼働率)

新たに建設する広域施設

焼却炉の規模
174t/日

(内訳)
ごみ分 157t/日
汚泥分 17t/日 **新規**

24t/日

現在使用している3施設

焼却炉の規模 198t/日

豊岡市施設 平成2年稼働
焼却炉の規模 140t/日

香美町施設 平成6年稼働
焼却炉の規模 28t/日

新温泉町施設 平成4年稼働
焼却炉の規模 30t/日

現在使用している3施設と新施設の規模を比較すると

現在稼働している3施設の合計と新施設とを比較すると、炉の規模で24t/日の差があります。しかし、新施設には汚泥分(17t/日)も含まれるため、それを除き純粋にごみ分だけで比較すると、41t/日(20.7%)の規模縮小となります。

し尿・下水汚泥も焼却後、灰を溶融固化し、建設資材としてリサイクルします

最近では、ごみや汚泥を焼却した後に残る焼却灰とばいじん(飛灰)は、高温で溶融処理(灰を溶かす処理方法)が行われています。そして、溶けた灰を急速に冷やして、ガラス質の「スラグ」と呼ばれるものに固め、建設資材として活用されています。

全国の汚泥のリサイクル率は、建設資材への活用によって最近急上昇しています。

北但の新施設においては、ごみと汚泥と一緒に焼却・溶融する計画ですが、現在、焼却灰とばいじんの溶融固化処理については、外部に委託してリサイクルすることも検討されています。

問合せ
生活環境課環境衛生係

